

ル人の多くが置かれている状況はおそらくエチオピアと同等であり、たとえば東欧諸国とくらべると極端に悪い。

ブラジル文部省の報告によると、文教財政の三分の一は学校給食にあてられている。というのは、公立学校の生徒のほとんどが、学校で食事を食べなければ全く食事なしで過ごさなくてはならないからである。

「サウス」誌(第三世界を扱うビジネス誌)によると、ブラジルの乳幼児死亡率はスリランカよりも高い。人口の三分の一は貧困基準以下の生活を送っており、「七百万もの見捨てられた子供が路上で乞食をしたり盗みを働いたりシンナーをすったりしている。二千万もの人は、スラム街のあばらやに住み、さらに、橋の下を寝床とする人も増加している。」^{★27}

これが、天然資源の点からいうと世界一裕福なブラジルの現状である。^{☆18}

状況はラテンアメリカのどこでもほぼ同じである。一九七〇年代から今までに、米国に支援された軍隊によって殺された人の数は、中米だけで、二十万人にのぼるが、これは、民主主義と社会改革を求めた大衆運動が無差別に狙われた結果である。リベラルな「ニュー・リパブリック」紙の感嘆すべき言葉を借りると、こうした成果をあげたおかげで、米国は「我々の時代に

★27 ストリート・チルドレンの現実については、デイモン・スタイン著『風みたいにな、ぼくの生命』(神崎牧子訳、現代企画室、一九九二年)に詳しい。

☆18 (四九―五〇頁) ブラジルおよび第三世界一般の状況。
Chomsky, *Detering Democracy*, Chapter 7, South Commission, *The Challenge to the South*, Oxford University Press, 1990
[「南」への挑戦: 『南』委員会報告書]、国際開発ジャーナル社、一九九二年)

ける民主主義の大勝利の創造的刺戟源」とみなされる資格が十分にある。トム・ウォルフによると、一九八〇年代は「人類がこれまでに経験した黄金時代の一つ」である。スターリンがかつて言ったと同様に、我々は「成功にも眩むほど」なのである。

二、 磔にされたエルサルバドル^{☆19}

エルサルバドルでは、米国が擁立し支援している政府が、何年にもわたって弾圧や拷問、殺人を行ってきたが、米国内では関心をもたれなかった。エルサルバドルの状況はほとんど全く報道されなかったが、一九七〇年代後半に米国政府はいくつかの点に関心を向けるようになった。

一つは、隣国ニカラグアの独裁者ソモサが国内での支配権を失いつつあったことである。これにより、米国は中米地域での軍事介入の基地を失いつつあった。二つめの問題は、それ以上に重大であった。一九七〇年代にエルサ

☆19 (五一―七四頁) 中米。

Chomsky, *Turning the Tide: Culture of Terrorism: Necessary Illusions: Detering Democracy*; Hernan and Chomsky, *Manufacturing Consent*, John Hassett and Hugh Lacey, *Towards a Society that Serves its People: the Intellectual Contributions of El Salvador's Murdered Jesuits*, Georgetown University Press, 1992.

ルバドルで「民衆組織」といわれるもの——農民組合、共同組合、労働組合、教会の聖書研究会から発展した互助組織などが成長した。これらが「民主主義の危機」をもたらしたのである。

一九八〇年二月にエルサルバドルのオスカル・ロメロ大司教はカーター大統領に手紙を送り、エルサルバドルを支配していた軍事政権に軍事援助を行なわないよう嘆願した。彼は、米国からの軍事援助が「本当に基本的な人権の尊重のために」奮闘している「人々の組織に対する不正と弾圧を強化する」ために用いられていると述べた（これはもちろん、ワシントンにとつてはニュースとはならなかった）。

数週間後、ミサの最中にロメロ大司教は暗殺された。^{★28}ネオ・ナチのロベルト・ダビッソンが（ほかの多くの虐殺に加えて）この暗殺にも関わっているといわれている。ダビッソンは現在エルサルバドルを支配しているAREN A党（民族主義共和同盟）の「終身党主」であり、現エルサルバドル大統領のアルフレド・クリスチャニ^{★30}を始めとするAREN A党の党員は、彼に血の忠誠を誓う必要があった。

十年後のロメロ大司教暗殺記念ミサには、海外から多くの司教が参加した。ほか、何千もの農民や都市の貧しい人々が集まったが、その中で、米国の参加がなかったことは注目に値する。エルサルバドルの教会は、ロメロ大司教を聖人とする申請を正式に行なった。

これらすべての出来事は、ロメロ大司教の暗殺者に援助を行ない訓練をほどこした米国ではほとんど紹介されなかった。「公式記録の新聞」「ニューヨーク・タイムズ」紙は、暗殺について、それがおこった年にもそれ以降にも社説を掲げなかったし、また記念ミサに関しては社説はいうまでもなく記事すらなかった。

ロメロ大司教が暗殺される二週間前の一九八〇年三月七日に、エルサルバドルでは戒厳令が出され、国民に対する戦争が（米国の支持と関与のもとに）本格的に始まった。最初の大規模な攻勢はリオスンプルの虐殺^{★31}である。これはホンジュラスとエルサルバドルの軍隊が共同で行なったもので、少なくとも六百人が惨殺された。子供達はなたで切り刻まれ、女性は拷問されたくも水の中に沈められた。その後何日にもわたって、川では人体の切れはしがみつかった。教会関係者が虐殺を目撃していたため、情報はすぐに国外に伝えられたが、米国の主要メディアは掲載価値なしと判断した。

★28 当時カトリック教会が独裁政治と右翼テロへの非難を激しくするにつれ、極右派は「司祭を殺して愛国者になれ」と煽動していた。

★29 国家警備隊幹部としてワシントンや台湾で反ゲリラ訓練を受けた。八〇年前後には、彼がテレビで名指して反体制派の誰かを告発すると間もなくその人物が暗殺される事態が続発した。ロメロ大司教の場合も同じだった。ダビッソンは八一年一月、民族主義共和同盟（AREN A）を結成し、選挙の度に「エルサルバドルを赤の墓場に！」とのスローガンを掲げて躍進を重ねた。

★30 一九八九年三月の大統領選挙にAREN Aから立候補し、キリスト教民主党候補に大差をつけて勝利した。

★31 一九八〇年五月一四日に起こった出来事。六九年の「百時間戦争」以降、エルサルバドル、ホンジュラス両国は国交を断絶していたが、ニカラグア革命やエルサルバドル解放闘争の進展を前に、米国はホンジュラスを「反共の砦」とするために両国の和平を画策し、八〇年一〇月にこれを実現した。その後から、両国軍は米国の調整の下で共同軍事訓練を積み重ねていた。

この戦争の最大の犠牲者は農民で、さらに、労働運動家や学生、聖職者など、人々の利益のために働いているという疑いをかけられたすべての人が狙われた。カーター政権の最後の年である一九八〇年には犠牲者の数は一人にのぼり、レーガンが政権についた一九八一年には犠牲者は一万三千人に増えた。

一九八〇年十月に、エルサルバドルの新しい大司教は、公安軍が行なっている「無防備な一般市民を絶滅させる戦争」を非難した。その二カ月後に、米国が支持する「穏健派」ホセ・ナポレオン・ドゥアルテが軍事政権下で文民大統領に任命されたが、そのときにドゥアルテは、公安軍を「政府転覆を押しやるために人々と共に勇ましく活動している」と褒め賛えた。

「穏健派」ドゥアルテの役割は、米国籍の尼僧四人が軍に強姦され殺された^{★33}あと、軍部支配の実情を隠してエルサルバドルに対する米国の軍事援助を維持することであった。というのは、この事件に対しては米国内でも抗議の声があがったからである。エルサルバドル人を殺すのはまあいいが、米国の尼僧を強姦して殺すことは明らかにPR上不都合だというわけである。カーター政権とその調査委員会が出した結論にしたがって、メディアはこの事件を

避けて軽く扱ったのではあるが。

次いで登場したレーガンとその仲間達、特に国務長官アレクサンダー・ヘイグと国連大使ジーン・カークパトリックは、さらに一歩進んで虐殺の正当化をはかった。それでも、何年かのちに、裁判ショーを行なう意義があると認められはしたが、裁判ショーのうらで、残酷な軍事政権とその後ろ盾である米政府は免罪となった。

これらの虐殺を報道したはずだったエルサルバドルの独立系新聞は破壊されていた。それらにせよ親ビジネス派だったのであるが、それでも軍事政権にとっては独立し過ぎていたのである。軍事政権は、独立系の新聞が引き起こす問題を一九八〇年から一九八一年のあいだに解決した。すなわち、一紙の編集者を公安軍を用いて暗殺し、別の新聞の編集者を亡命に追い込んだのである。いつも通り、これらの出来事については、米国の新聞では数語以上費やす価値はないとみなされた。

一九八九年十一月には、六人のイエズス会司祭とその料理人および料理人の娘が軍隊に殺された。^{★34} 同じ週には少なくとも二十八人のエルサルバドル市民が殺されたが、その中には、ある有力な労働組合の長、大学の女性組織の

★32 キリスト教民主党幹部。一九七九年ロメロ政権を打倒したクーデター後成立した軍民評議会に参画。軍部右派と組んで八〇年大統領の座についた。八四年の大統領選挙でも当選。

★33 一九八〇年一月二日の出来事だった。彼女たちは、軍の「掃蕩作戦」で追われた人びとに食料・衣料の配給をしていて、「共産主義に手を貸すもの」として右翼の脅迫を受けていた。米国内におけるあまりの反響に、米政府は対エルサルバドル軍事援助（五〇〇万ドル）を停止したが、前記ドゥアルテの大統領就任を機にこれを支えるために一カ月半後の八年一月には援助を再開。間もなくレーガン大統領の時代に入ってから、さらに援助が強化された。

★34 この事件に関しては、ジョン・ソプリノ、S J著『エルサルバドルの殉教者』（山田経三監訳、一九九二年、拓植書房）が詳しい。

リーダー、インディオの農業組合の九人のメンバー、十人の大学生が含まれていた。

A Pの特派員ダグラス・グラント・マインはこれに関してニュース電信を送り、兵士達が首都サルバルドルの労働者が住む地域に侵入して六人の男と（おまけとして）十四歳の少年とを壁に向かって並ばせ射殺した様子を報告した。マインは、殺された人々は「聖職者でも人権活動家でもなかったのだ」「彼らの死はほとんど注目されなかった」と書いたが、彼らの死だけでなく、マインの報告もほとんど注目を浴びなかった。

六人のイエズス会士を殺害したのは、米国が創設し、訓練し、武器を供給したエリート師団、アトラカトル大隊であった。この大隊は、一九八一年三月、十五人の対ゲリラ戦専門家が米軍特殊部隊学校からエルサルバルドルに送り込まれたときに創設された。創設当初から、この大隊は大量虐殺に関与していた。ある米国の訓練士によると、アトラカトル大隊は「特別に残忍で……彼らに耳ではなく捕虜を取ってくるよう教えるのに苦労した」ほどであった。

一九八一年十二月に、アトラカトル大隊は、殺人と強姦、放火の祭典を行

ない、千人以上の一般市民を殺害した。^{★35} その後も、村への爆撃に参加したり、射殺や水漬けなどによって何百もの市民を殺したりした。犠牲者の大多数は女性や子供、老人であった。

アトラカトル大隊は、イエズス会士を殺害する直前に、米軍特殊部隊の訓練を受けていた。最悪の虐殺は米国による訓練の直後に行なわれるというパターンは何度か繰り返された。

「巢立ちつつある民主主義」国エルサルバルドルでは、十三歳の少年達がスラムや難民キャンプの掃きだめからすくい取られて、強制的に兵士にさせられる。彼らは、暴力と強姦を含むナチのSS風の儀式によって洗脳され、これを通してしばしば性的および悪魔的性格をおびる殺害行為への道が準備されるのである。

エルサルバルドル軍の訓練の性質については、一九九〇年に米国内務省がエルサルバルドルへの送還要請を出したにも拘わらずテキサス州で政治亡命者として認められた、ある脱走者が述べている。（彼の名はエルサルバルドルの死の部隊から守るために法廷で発表されなかった。）

この脱走者によると、徴兵された人々は、犬やはげたかを、咽を噛みちぎ

★35 この事件はエル・モンテ村で起こった。米国で訓練を受けたアトラカトル大隊が起こしたこの事件の報道は、犠牲者の写真と共に直ちに米国でもなされた。レーガン政権はこれをデマだと断定しマスコミもこれに追随したためにエル・モンテ事件は以後忘れ去られた。こうして、エルサルバルドル内戦は、政府側が米国の資金に支えられる形で、続いた。

り首をもぎ取って殺すよう強制され、また、兵士が反体制派の疑いをかけられた人々を拷問して殺害する場面——爪を剥いで頭を切り離し、体をばらばらにし、切り取った腕で遊ぶといった場面——を見なくてはならない。

また、アトラカトル大隊と関係の深い死の部隊の隊員だったセサル・ビエルマン・ホヤ・マルチネスは、死の部隊の活動に米国のアドバイザーとエルサルバドル政府が関与していることを詳細に述べている。ブッシュ政権は、彼を黙らせるためにあらゆる努力をし、人権組織の請願や彼に証言させるべきだという議会の要請にもかかわらず、マルチネスを（おそらくは死がまっている）エルサルバドルへ送還した。（イエズス会士の暗殺に対する証人も米国で同様に扱われた。）

エルサルバドル式の軍隊訓練の効果については、エルサルバドルで働くカトリックの司祭ダニエル・サンチアゴが、イエズス会の雑誌「アメリカ」の中で詳しく述べている。彼は、ある農婦の例をあげている。その農婦は、ある日家に戻ってきて、三人の子供、母そして妹の胴体がテーブルを囲んでおり、テーブルの上のそれぞれの胴体の前には切り取られた頭が注意深く置かれ、さらに、あたかも「自分自身の頭を叩いているように」その上に手がの

せられているという光景に出会ったのであった。

エルサルバドル治安部隊の殺人者たちは、十八カ月の赤ちゃんの頭をきちんとテーブルに据えることができなかったため、手を頭に釘で打ちつけていた。テーブルの真ん中には血をたたえた大きなプラスチックの容器が、おいしそうに置かれていた。

サンチアゴ師によると、このようなおぞましい光景は特に珍しくない。

エルサルバドルでは、死の部隊はただ人々を殺すのではない。人々は切り刻まれ、頭は槍に刺されて目印のように置かれる。エルサルバドル特殊警察はただ男のはらわたを抉りだすだけでなく、切り取ったペニスや口を口につまむ。治安部隊はただ女性を強姦するだけでなく、子宮を体から切り取って顔に被せる。ただ子供を殺すだけでは足りないのです、肉が骨からそげ落ちるまでバラ線にこすりつけ、それを親に強制的に見物させる。

サンチアゴ師はさらに、教会が貧しい人々を組織化するために農民組合や

互助組織を作り初めてから、こうした暴力がとも増えたことを指摘している。

米国の対エルサルバドル政策はおおむね成功した。ロメロ大司教が予測したように、いまやエルサルバドルの大衆組織は壊滅寸前となった。何万もの人々が屠殺され、百万を越す難民が生まれた。これは米国史上最も卑劣なエピソードの一つであるが、悲しいことに、これに匹敵するエピソードは他にも沢山ある。^{★36}

三、ニカラグアへの教訓

一九七〇年代に米国の主要メディアが無視してきたのはエルサルバドルだけでない。一九七九年にニカラグアの独裁者アナスタシオ・ソモサが追放されるまでの十年間に、米国のテレビ——すべてのネットワーク——がニカラグアに費やした時間はちょうど一時間であり、それは一九七二年のマナグア

地震についてであった。

一九六〇年から一九七八年の間に、「ニューヨーク・タイムズ」紙はニカラグアについての社説を三度掲げただけであった。これは、ニカラグアで何もおこっていなかったからではなく、ただ、ニカラグアでおこったことはいしたことを考えられていなかっただけである。ソモサ^{★37}の恐怖政治が揺るがなにかぎり、ニカラグアは米国にとってまったく問題ではなかったのである。

一九七〇年代の後半に、サンディニスタ^{★38}によってソモサの支配が揺るぎだすと、米国はまず「ソモサなしのソモサ体制」——すなわちソモサ以外の誰かがソモサの代わりにこれまでと同様の腐敗政治を続ける体制——を擁立しようとした。これがうまくいかなかったので、カーターはソモサの治安部隊を米国の権力基盤として維持しようとした。

ニカラグアの治安部隊は常に非常に暴力的でサディスティックであった。一九七九年六月までに、治安部隊はサンディニスタに対する戦争と称して大規模な虐殺を行ない、首都マナグアの居住地域を爆撃し、何万もの人々を殺害していた。このころ、米国のニカラグア駐在大使はホワイト・ハウスに電信を送り、次のようにいっていた。治安部隊に爆撃をやめるようというのは

★36 一九八〇年以降激化して十数年続いた政府軍と反政府ゲリラの内戦で、人口五〇〇万人のこの国で、死者七万人、内外への難民は一〇万人に達した。米国の全面的な援助を受けながら政府軍はゲリラを壊滅できず、一方ゲリラは一時は全土の三分の一を支配区にしながら、ついに軍事的勝利にまでは到達できないまま、九〇年隣国ニカラグアにおけるサンディニスタ政権の崩壊、九一年ソ連解体などの事態を迎えた。両者は九二年一月和平合意を達成、九四年三月四月には議会・大統領選挙が行なわれた。

★37 米国は二〇世紀初頭以来長い間ニカラグアを軍事占領していたが、一九三二年撤退を前に国家警備隊の創設を条件づけた。警備隊の初代長官に任命されたアナスタシオ・ソモサは三六年クーデターを起こして当時の自由党政権を打倒、以後ソモサ家は裕福な農園主の家系にあることに加え、米国の全面的な支援の下で、政治・経済・軍事の全権を握り続けた。何代にもわたって一族支配を繰り返していたが、ついに七九年サンディニスタによって打倒された。

★38 一九二七年ニカラグアを軍事占領した米国海兵隊に対して反米ゲリラ戦争を展開し、三三年撤退に追い込んだたかしの指導者・アウグスト・セサル・サンディノに因んで、六一年解放闘争を開始した後世の人びとは、自らをサンディニスタと称した。

「軽率である」。なぜならば、それは、治安部隊を権力の座にすえておき、サンディニスタを排除するという米国の政策に影響しかねないからである。

米国の米州機構(OAS)^{★39}大使もまた、「ソモサなしのソモサ体制」を支持する発言をしたが、OASはこれを即座に却下した。何日か後、ソモサはニカラグア国軍の残りとともにマイアミに逃げ、治安部隊は崩壊した。

カーター政権は治安部隊の司令官たちを赤十字の印を付けた飛行機で国外に逃がし(これは戦争犯罪である)、ニカラグア国境地帯で部隊の再建を開始した。カーターはまた、アルゼンチンを代理人として用いた。(当時アルゼンチンはネオ・ナチの将軍たちに支配されていたが、将軍たちは、自国民に対する拷問と殺害をちょっと中断して、ニカラグアの治安部隊——その後すぐにコントラ^{★40}または「自由の戦士たち」と名前を変えた——を再建するために協力した。)

レーガンはコントラを使ってニカラグアに対する大規模なテロ戦争を開始すると同時に、経済戦争をしかけたが、これはニカラグアにとってはテロよりも致命的となった。また、他の国々に対して、ニカラグアを援助しないよう脅迫した。

しかしながら、天文学的な額にのぼる軍事援助にもかかわらず、米国は、ニカラグア国内に有効な軍事勢力を作り出すことはできなかった。よく考えると、これは注目に値する事実である。米国がコントラに与えた援助に少しも近い資金を使うことができた本当のゲリラはこれまで世界中どこにもいなかった。おそらくコントラが米国から得た資金をもってすれば、米国の山岳地帯でゲリラ戦を始めることすら十分可能であったろう。

なぜ米国はニカラグアにそこまで精力を注ぎ込んだのであろうか。国際的な経済開発援助組織オックスフアム^{☆20}は、次のように述べて、その本当の理由を説明している。七十六の発展途上国におけるオックスフアムの経験に照らして判断するかぎりでは、「政府が人々の状況を改善し、開発過程への人々の積極的参加を奨励するという点で、ニカラグアは例外的存在である。」

オックスフアムがある程度関与している中米四カ国(エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア)のうち、土地所有の不公平是正、貧農に対する保険、教育、農業サービスの展開に向けて十分な努力をしていたのはニカラグアだけであった。

ほかの機関もニカラグアについて同様のことを述べている。一九八〇年代

★39 一九四八年コロンビアのボゴタで開催された米州諸国会議で米国とラテンアメリカ諸国の地域的協力機構として設立が決まり、五年に発効した。米国の主導の下で運営されることが多く、四五年グアテマラのアルベンス政権(二六頁参照)に対する「反共決議」、六二年キューバ除名決議、六四年対キューバ外交・貿易関係断絶決議、六五年ドミニカへの米州平和軍派遣決議などを行なった。

★40 一九七九年七月のサンディニスタ革命の一年半後には、革命に反対する反革命勢力「コントラ」の軍事行動が始まった。

☆20 (六三頁) オックスフアムの説明。Dianna Melrose, *Nicaragua: the Threat of a Good Example*, Oxfam, 1985.

前半に、世界銀行は、そのプロジェクトが「ニカラグアにおいては、いくつかの面で、世界のどこよりも優れた成功を収めた」と言っている。一九八三年に米州開発銀行は「ニカラグアでは、長期的な社会経済的發展の基礎を築く社会行政面で注目すべき進歩が達成された」と結論している。

サンディニスタ改革の成功は米国の政策立案者たちを恐怖に陥れた。彼らは、コスタリカ民主主義の父であるホセ・フィゲレス^{★41}がいみじくも述べたように、「ニカラグア史上初めて、自国民の面倒を見る政府が登場した」ことに気づいたのである。(フィゲレスは四十年來、中米における民主主義の中心人物であったが、彼の現状分析は米国にとっては許しがたいものであったため、米国のメディアから完全に排除された。)

サンディニスタが資源を貧しい人々に割り当てようと努力したこと(そして成功させたこと)により引きおこされた、米国のサンディニスタに対する憎悪はまったく驚くべきものであった。ほとんどすべての米国の政策立案者がこの憎悪を共有し、それはほとんど激怒といってよいレベルに達した。

一九八一年に、ある国務省の職員は「ニカラグアを中米のアルバニア」にする¹と豪語した。すなわち、貧しく、孤立して、政治的には急進的であると

いう状態である。これにより、ラテンアメリカの規範となるような新しい政治モデルを作ろうというサンディニスタの夢を破壊するために。

ジョージ・シュルツは、サンディニスタは「我々の大陸のすぐそこにある癌」であり、破壊しなくてはならないと述べた。一方、上院のリベラル派議員アラン・克蘭ストンは、もしサンディニスタを外から破壊することができないならば、彼らが「自らの分泌物で化膿する」よう仕向けなくてはならないと述べている。

そんなわけで、米国はニカラグア攻撃のための三面作戦に出た。第一に、世界銀行と米州開発銀行に、ニカラグアに対するすべてのプロジェクトと援助をやめるよう非常に強い圧力をかけた。

第二に、オックスファムが正しくも「良い例の脅威」と呼んだ状況を破壊するために、コントラ戦争と違法な経済戦争を開始した。米国の指令の下でコントラが行なった「柔らかない標的」に対する卑劣なテロ攻撃は、経済的ボイコットとあいまって、経済發展と社会改革の希望を押し潰した。米国のテロに対抗する必要が生じたことにより、ニカラグアは軍隊を解散できなくなつたため、非常に貧しい財源を米国に支援された独裁者とレーガンの犯罪が

★41 一九四八、一九四九年、五三、五八年、七〇、七四年の三度にわたって大統領を務めた中道左派の政治家。

残した廃虚を再建するために用いることが不可能となった。

尊敬すべき中米特派員の一人、ジュリア・プレストン（当時ボストン・グローブ紙勤務）は、「米国の行政官は、コントラが、ニカラグアの貧しい資源を社会政策から戦争へと向けざるをえなくしたことによって、サンディニスタを弱体化化することに満足していると述べている」と報告した。ここに最も重要な点がある。すなわち、社会政策こそが、ラテンアメリカのほかの地域に感染して、米国の搾取と略奪体制をつき崩す可能性を秘めた「良い例」の心臓部なのである。

米国は災害救済すら拒否した。一九七二年の地震時には、米国はニカラグアに巨額の援助を行なった。もっとも、そのほとんどは、米国の相棒ソモサが盗みとったのであるが。一九八八年十月に、もっとひどい天災ハリケーン・ジョーンがニカラグアを襲った。米国は、今度は一ペンスたりとも救済援助を送らなかった。というのは、もし援助を行なえば、それはおそらく、裕福なギャングたちのポケットではなく、人々に回されたであろうから。同時に米国は、ほかの諸国に、ニカラグアに援助を行なわないよう圧力をかけた。

この破壊的なハリケーンは、大量の飢餓と長期的な環境破壊という望ましい将来展望をもたらし、米国の努力を助けた。米国は、サンディニスタ政権の経済政策の失敗を非難できるよう、ニカラグアの人々が餓えることを望んだ。というのは、「我々が支配していないならば、ニカラグアの人々は苦しみ患って死ななくてはならない」からである。

米国がとった第三の方法は、外交上の詐欺である。コスタリカの雑誌「メソアメリカ」にトニー・アビルガンが書いたように、「サンディニスタは、コスタリカのオスカル・アリアス^{★42}大統領を始めとする中米の大統領が企んだ詐欺にはまり、一九九〇年二月の選挙で敗北した」。

アビルガンによると、ニカラグアにとって一九八七年八月の和平計画は望ましいものであった。それによって、「コントラを解散して戦争を終わらせるかわりに」選挙を何か月か早め、一九八四年と同様に国際的監視のもとで行なうことができたからである。ニカラグア政府は、この和平計画のもとで自分が行なわなくてはならないことを行なったが、ほかの誰も注意を払わなかった。

アリアスとホワイト・ハウスおよび米国議会は、この和平計画を実行に移

★42 一九八七年二月、アリアスが提出した「中米紛争に関する和平案」を基盤にして、その後の中米和平への歩みは具体化していった。アリアスが八七年度ノーベル平和賞を受賞したのはその「功績」によってなのだが、彼の動き方は米政府の戦略の枠を越えるものではなかった。

★43 一九八七年グアテマラのエスキブラスで開かれた中米五カ国首脳会議以降、中米紛争の平和解決に向けた動きが各国で具体化する。ニカラグアでもコントラの武装解除、大統領・国会議員選挙に向けての合意が整い、九〇年二月選挙が行なわれた。サンディニスタは予想に反して野党連合に敗北し、下野した。内戦に疲れた人びとは、親米政権の誕生によって内戦が終了し、経済が好転することを望んだのだった。

す意図をまったくもっていなかった。米国はコントラに対するCIAの供給便を三倍に増やし、数か月のうちにこの和平計画は完全に死んだ。

選挙戦が始まると、米国は、サンディニスタが勝った場合には、これまでニカラグアの首を絞めていた経済封鎖とコントラによるテロを続けることを明らかにした。こうしたもとの選挙を自由で公正とみなすことができるのは、ナチか忠実なスターリン主義者のような人々でなくてはならない。実際、米国国境の南で、この選挙が自由で公正であったという幻覚に惑わされた人はほとんどいなかった。

もしこれに類することが米国の敵によって行なわれたら……このときのメディアの対応は想像にかたくない。驚くべきことは、こうした状況で、サンディニスタが、敗北したとはいえ四十パーセントの支持を得たことである。一方、「ニューヨーク・タイムズ」紙の見出しは、米国民は「米国のフェア・プレイの大勝利」の「喜びに一同となった」と伝えた。

中米における過去十五年間の米国の成功は大きな悲劇である。これは、人々のおそるべき犠牲をともなったからというだけでなく、十年前には、実質をともなった民主主義および人々の必要に合致した進歩に対する展望があ

り、しかも初めのうちはエルサルバドルやグアテマラ、ニカラグアでそれが成功しつつあったからである。

人々の努力は実を結んだかもしれないが、そして同様の問題を抱える他の国々への良い例となっていたかもしれないが、米国の政策立案者たちは、まさにそのことを恐れていたのである。米国は、脅威を葬り去ることに成功した。おそらくは、ほぼ永遠に。

四、虐殺の荒野グアテマラ

グアテマラは、サンディニスタ革命より前に米国のメディアが取りあげた中米ただ一つの国である。グアテマラでは一九四四年に革命が起り^{★44}、悪名高い独裁者が追放されて、ルーズベルトのニューディール政策をモデルにした民主的政府が誕生した。それ以後十年にわたる民主的な時期には、独自の経済発展が成功するきざしが見られた。

★44 一九三一年以来のホルヘ・ウビコ独裁体制がこれで崩壊し、アレバロ政権の改革政策が始まった。

ワシントンは、これを見てヒステリーに陥った。アイゼンハワー大統領とダレスは、このウィルスを撲滅しないことには米国の「自衛と自己維持」が危ういと述べた。米国の諜報報告は、グアテマラの資本主義的民主主義が米国に与える危機について非常に率直に述べている。

一九五二年のあるCIAメモでは、グアテマラの状況は「社会改革と民族主義的政策の提唱に基づく……共産主義の影響」ゆえに「米国の利益に反する」と述べている。メモはまた、グアテマラが「最近、中米の他の国々で、共産主義的・反米的活動に対する支援を増加した」と警告している。その典型例として、ホセ・フィゲレスに対する三十万ドルの贈与をあげている。

前にも述べたように、ホセ・フィゲレスはコスタリカ民主主義の創立者であり、中米における指導的民主主義者である。彼は積極的にCIAに協力し、米国を「我々の大義を体現している」と言い、コスタリカの米国外大使が彼を「ユナイテッド・フルーツ社がラテンアメリカで見つけることのできる最高の宣伝者」と見なしたにもかかわらず、独自の方針をもっていたため、米国の相棒ソモサやほかのギャングほど信頼されていなかった。

米国の政治的レトリックのもとでは、独自の方針をもっているだけで「共産主義者」になりうる。したがって、もしグアテマラがフィゲレスの選挙での勝利を援助するために資金を与えたら、これはグアテマラが共産主義者を援助していることになる。

さらに悪いことに、とCIAメモは続ける。「ユナイテッド・フルーツ社を始めとする外国の経済利益の迫害」を含む、民主的資本主義政府の「急進的で民族主義的な政策」は「グアテマラはほとんどすべての人に支持され受け入れられている」。政府は「これまで政治的に無気力だった農民を動員し」始め、大規模土地所有者の権力を減じつつある。

さらに、一九四四年の革命により「グアテマラを軍事独裁や社会的停滞、経済的植民地化から解放する強力な国民的運動」がおこり、「政治的に覚醒したほとんどのグアテマラの人々の、自国利益への忠誠と同調を引きおこした」。土地改革の成功が、それを知った貧しい人々を擁する周辺諸国の「安定」を脅かし始めると、事態はさらに悪化した。

つまり、状況はひどかったのである。そこでCIAはクーデターをおこし、成功させた。それ以来グアテマラは虐殺の場となり、事態がそこからずれる恐れがでるたびに米国が介入したため、虐殺の場として現在に至っている。

★45 その恐るべき現実の一部は一九九二年度ノーベル平和賞受賞者リゴベルタ・メンチュウ著『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』（高橋早代訳、一九八七年、新潮社）やオルタ・シネ制作のビデオ『風の記憶——先住民族抵抗の五〇〇年』（日本語版は一九九二年、アジア太平洋資料センター）で知ることができる。

一九七〇年代後半、虐殺が再びおそるべき規模となったため、抗議の声があがった。それにもかかわらず、多くの人々が信じたこととは逆に、カーターの「人権」政権のもとで、グアテマラへの軍事援助は以前と同じレベルで行なわれた。米国の同盟諸国も、米国の大義に足並みをそろえた。中でも特筆すべきは、国家テロの指導者として成功しているためもあって米国がその「戦略的価値」を評価しているイスラエルである。

レーガン政権下で、グアテマラでの皆殺しに近い虐殺は、恍惚としてしまうほどの規模となった。レーガンは、グアテマラにおけるヒトラー中のヒトラー^{★46}とでもいふべきリオス・モンテを民主主義に全てを注ぎ込んだ男として賛えている。一九八〇年代前半にワシントンの友人たちは何万もの人々を殺害したほか、数えきれないほどの人々を拷問し、強姦した。犠牲者の多くは高地のインディオで、虐殺は非常に多くの地域で行なわれた。

一九八八年に新たに始まったグアテマラの新聞「ラ・エポカ」紙の事務所が政府のテロリストによって爆破された。ちょうど同じ時期に、米国のメディアは、ニカラグア政府の転覆をおおびらに提唱し、米国が維持するテロ部隊を支持する、米国が創立したニカラグアの新聞「ラ・プレッサ」の何号

かが紙不足で出版できなかったという事実に興奮しまくっていた。「ワシントン・ポスト」紙や他の新聞は、「ラ・プレッサ」の事件はサンディニスタの全体主義を証明するものであるとして激怒と非難を浴びせていた。^{★47}

一方、「ラ・エポカ」紙の破壊は、米国のジャーナリストたちには良く知られていたにも拘わらず、まったく関心をひかず、報道されなかった。もちろん、グアテマラで声をあげようと試みたばかりの小さな独立紙を米国が支える治安部隊が黙らせたという事件を、米国のメディアがとりあげることを望むのは無理な話であるが。

その一年後、「ラ・エポカ」紙のジャーナリストで、爆撃のあと国を逃れたフリオ・ゴドイが、短期間ではあったが、グアテマラを訪ねた。米国に戻ってから、彼は中米の状況を東欧の状況と比較し、東欧は「中米よりも幸運である」と書いている。というのは、

モスクワがプラハに押しつけた政府は、改革論者を左遷し侮辱するが、ワシントンがグアテマラに作った政府は改革論者を殺す。政府は、アムネステイ・インターナショナルが「政治的謀殺の政府プログラム」と名

★46 一九八二年三月の青年将校によるクーデター後軍事評議会議長に就任、八三年八月のクーデターで解任されるまで大統領の座にあった。彼は「豆とライフル（服従する者には豆を、服従しない者にはライフルを）」のスローガンの下への全国民の動員を強いつつ、ゲリラ支持と見た先住民の村を徹底的に焼き討ちした。

★47 用紙不足というより検閲の問題については、野々山真輝帆著『ニカラグア 昨日・今日・明日』（一九八八年、筑摩書房）がサンディニスタと「プレッサ」の双方の言い分を聞き、検閲で掲載されなかった記事を分析して、「内戦下での自由」の問題について考察している。

づけた、すでに十五万人もの犠牲者を出した皆殺し政策をいまだに続けている。

グアテマラでは、報道は、服従するか、もしくは「ラ・エポカ」のように消えるかのどちらかしかないのである。

ゴドイは続ける。「ホワイト・ハウスには、アステカの神を信じて、中米の人々の血を必要としている人々がいるのではないかと信じたくなる」。さらに彼は、ある西欧の外交官の次のような言葉を引用した。「米国人が中米地域に対する態度を変えないかぎり、中米には真実の余地も希望の余地もない」。

五、パナマ侵略^{☆21}

パナマはこれまでずっと、全人口の十パーセントにも満たないヨーロッパ

☆21 (七四―八三頁) パナマ。
Chomsky, *Detering Democracy*,
Chapter 5.

人種のエリートに支配されてきた。けれども一九六八年にポピュリストのオマール・トリホス[★]がクーデターで政権を握り、その軍事独裁のもとで黒人とメスティン(混血)の貧民に最小限の権限を与えたことによって事態は変化した。

一九八一年にトリホスは飛行機事故で殺された。一九八三年までに、トリホスのもとで米国諜報部と共犯関係にあったマヌエル・ノリエガが事実上の支配者となった。

米国政府は、ノリエガが、少なくとも一九七二年、すなわちニクソンがノリエガの暗殺を検討したところから麻薬取引に関わっていたことを知っていた。それにもかかわらず、ノリエガは、CIAの手先として活動を続けた。一九八三年に、米の上院委員会は、パナマが、麻薬資金の「浄化」と麻薬取引の中心となっていると結論した。

その一方で、米国政府はノリエガの奉仕活動を引き続き評価した。一九八六年五月には、麻薬取締局の局長がノリエガの「精力的な反麻薬取引政策」を褒め賛えた。その一年後、局長はノリエガとの「緊密な連帯を歓迎」し、さらに、司法長官エドウィン・ミーズはノリエガの犯罪行為に対する米国防

★48 一九二九―八一年。民族主義的政策を推進し、米国政府との間でパナマ運河返還交渉に乗り出し、七八年新運河条約を締結して二〇世紀末の運河地帯全面返還を決めた。彼の生涯とその事故死については、グレアム・グリーン著『トリホス將軍の死』(斉藤教衛訳、一九八五年、早川書房)が詳しい。